

ロンドンのエコロジーパーク (生態園) II

土田 勝 義

信州大学教養部自然保護

The Ecology Parks in London II

Katsuyoshi TUCHIDA

Lab. of Nature Conservation, Fac. of Liberal Arts, Shinshu University.

Key words: nature area, ecology park, Gillespie Park, Parkland Walk, London

はじめに

イギリスの首都で大都会であるロンドンには、いわゆる都市公園と呼ばれる人工的な大公園が随所にある。一方、わずかに残された自然地域や、あるいはわざわざ復元して作られた自然公園も小面積ながら各所に多数ある。これらは総称として nature area (自然地域)といわれている (London Ecology Unit1990)。これらの自然地域はさまざまな形態があり、さまざまに利用されているが、その一タイプとして ecology park (エコロジーパーク:生態園)がある。筆者は前報 (土田1994)で、2ヶ所のエコロジーパークを紹介したが、1994年の秋にロンドンを再訪し、これらのエコロジーパークとは異なるタイプのエコロジーパークを知ることができたので報告する。なおこれに関連して、ロンドンの自然環境の保全に関する知見も若干述べたい。

ロンドンの自然環境の保全

大都会ロンドンには、多くの、広大、かつ立派な都市公園が存在するが、これらはほとんど庭園風、人工的な公園で、整ってはいるが、画一的で単純であり、筆者のような外国人の訪問者でも、圧倒はされるが、なにか物足りない感じがする。これはロンドンのみならず、どこの都市公園でも共通であるが、やはり都市公園は自然度が低いということがその原因の一つと思われる。ロンドンに生活している人々にとって、かつて豊かにあった自然は、都市化の過程で失われ、自然と疎外した生活が続いてきた中で、身近な自然を取り戻し、自然と共生する地域を望む傾向が高まってきた。

それに対応して、大ロンドン市庁 (GLC) では、ロンドン市内に残存する自然度の高い地域を保存し (nature reserve), また活用していく (ecology park) ことを推進している (GLC1985)。これらを実際推進し、指導しているのは、GLCの管轄にある London Ecology Unit (ロンドンエコロジー局: LEU) である。事務所はロンドンの都心の北部の Camden Heigh Street のビルの3階にある。筆者は LEU も再訪し、所長の David Goode 博士 (女性) に LEU の概要を聞くことができた。LEU は、市の外郭団体で、市の自然環境の保全と活用を専らサポートしている第3セクター的存在であるようである。事務所にはいくつかの製図機と自然保護の PR ポスターが多数張ってあるのが印象的であった。LEU はロンドン市内の自然環境の保全や活用計画、また復元、さらに環境教育などの普及活動をしている。またこれらに関する多数の書やパンフを発行している。

ロンドンでは nature area (自然地域) と認定されたものは、11タイプに分類されている (LEU1990)。すなわち緑地帯、学校内自然地域、野生園、地域園、市民農園、公園内自然地域、自然・生態園、自然保護区、放棄地域、保護田園地域、線状遊歩道 (以上直訳) である。これらは都市の中の自然であるので、原生的自然でなく、二次的自然であり、厳正保護区として保護されていることは少ない。大部分は、アメニティ、教育、レクリエーションに活用され一般に開放されている。その管理や維持の方法も様々であるが、多くは GLC の補助金、区の補助金、LEU、銀行や企業の寄付金、自然保護団体やボランティアの寄金などいろいろな団体から補助をうけ、地元の自然保護組織や自治

体が運営をしている。各々の自然地域では、ガイドブックやパンフレットを発行して効果的な利用をPRしている。これらの資料を援用しながら下記の事例について報告する。

エコロジーパークの事例

3. ギレスピー公園 (Gillespie Park)

ロンドンの都心の北部に位置し、Islington区（イズリントン区）に属しているエコロジーパークである。広さは約1.6haとそれほど大きくはない。草地、低木林、池、樹林等からなる。地下鉄のArsenal駅に隣接している。周辺は静かな住宅地で、裏手には鉄道が走っている。ここもかつては英国鉄道（BR）の石炭の貯蔵、輸送地であった。1970年代に閉鎖され、放置されたが、その後野生植物などが生育してきたので、地元住民の運動によって、自然公園として一部を分配してもらうことになった。そして1981年に設計、施工され1982年に開園した。その際、いろいろな生育環境、池、草地、林が造成され、樹木が植栽された。当初はBRからの借地であったが、その後取得された。現在、ギレスピー公園はイズリントン区レクリエーションサービス局によって、野生生物の繁殖地、レクリエーション、自然学習などの目的のために管理されている。実際の利用として、犬の散歩、草原への立ち入り、ピクニック、フットボールなども認め、またオープンスペースとしてもデザインされた。また都市生態に関するセミナー、サロンなども開催されている。公園の入口にある小さなCommunity Center内に事務所があるが当日は人が不在であった。地域住民は当初“自然”公園とする際に、浮浪者が集まったり、不審な行為が行われることを心配したが、現在では公園として受け入れられている。最近ではボランティアが公園整備を行い、また地域住民も手伝っている。利用者は週平均850人である。資金としては、土地は自治体が所有し、維持費はGLCの環境局と区が出している。1988年より将来計画が検討されている。当公園や周辺の宅地開発の要望が強いが、一方で公園の拡張も望まれている。また付属建物として、既存のセンターは小さいので、拡充が予定されている（図-1）（LEU1992）。

ところで筆者が1994年9月に訪れた際に、公園に隣接して新しい建物が立っていた。入口にはEcology Centerと書かれてあった。立ち寄ってみると当日は2名の所員がいたが、いろいろ様子を聞くことができた。それによると当センターはイズリントン区立で、Nature Conservation Office（自然保護事務所）とな

っている。建物は1993年秋に建設された。スタッフは5名で1名の園丁がいる。たまたま所長（女性）は不在していた。すべて区の職員であるという。施設を案内してもらったが、事務室、展示室、ホール、実習室、図書棚、工作室、また二階は野外展望・観察室となっていた。外部はオープンスペースで、そこには池のビオトープが造成され、ギレスピー公園と接して野菊の野草が広がっていた。ここでは、先述のセンター機能が強化され、この施設やギレスピー公園を利用して、学校の児童や学生のための自然学習、環境教育が行われている。土日も開かれていて、子供や勤め人も利用が可能となっている。このように施設やスタッフが充実していることに驚きであった（写真-1, 2）。

4. パークランドウォーク (Parkland Walk)

直訳すれば公園歩道であるが、歩道公園が適訳である。固有名詞なのでここではそのままパークランドウォークとする。この公園は、使用が中止された鉄道路線そのものを歩道公園として利用しているの、幅は



写真-1 ギレスピー公園の池の整備

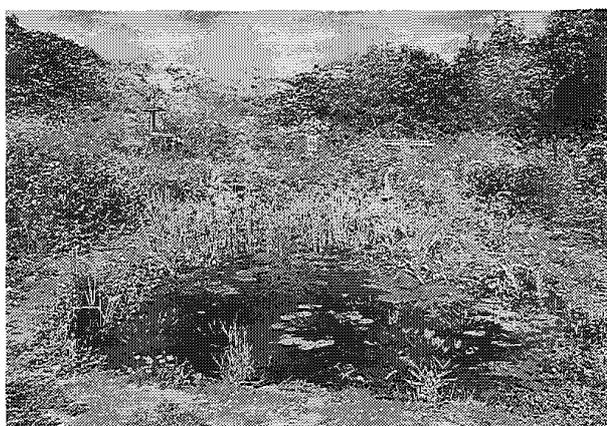


写真-2 イズリントンエコロジーセンター内の造成されたビオトープ

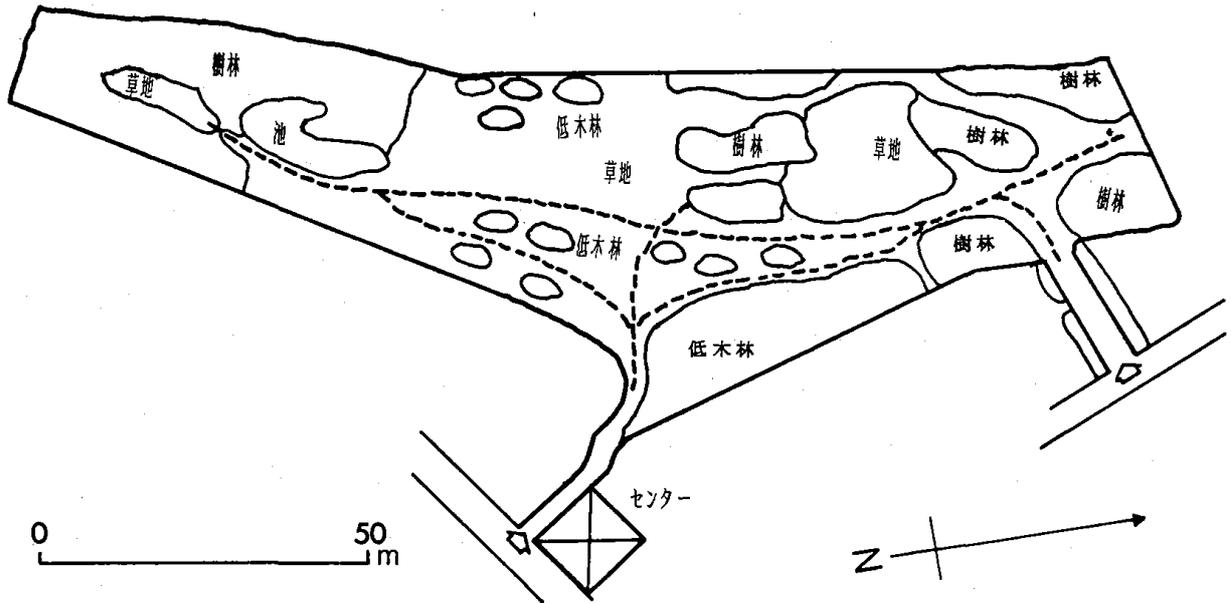


図-1 ギレスビー公園の概要

細く10—15m，総延長は約4 kmもある。ここは上記のギレスビー公園にも近い。地下鉄の Highgate 駅や Queen's Wood（森林公園）に隣接する。他と異なって終日開園している。1970年に鉄道としての利用が中止され，その後放置されたが，地元の Haringey 区がロンドン交通局に歩道公園にすることを要請した。一方住宅建築の要請もあったが，1978年に歩道用地，および自然保護区として利用するようになった。また1983年には案内所が設けられた。

パークランドウォークは2区に別れ，Queen's Woodの森を境としている。大部分は幅の狭い低木林と樹林であり，主要種はシラカンバ，カシ，ハンノキ，サンザシなどである。また草地も各所にある。250種の植物，58種の野鳥，19種の蝶が確認されている。時々リスもみられた。入口は10ヶ所ある。GLCと区が所有している。周辺住民の散歩，犬の散歩，子供達の遊び場，ジョギングなどのレクリエーションや，自然観察，自然学習の場ともなっている。2名の園丁がいるが，利用者が多いことと広い（長い）ので，管理もゆき届かず，人による攪乱が目立ち，野生生物にも影響が出ている。歩道公園を道路にという開発の要望が高く，保護団体が反対運動をしている（写真-3，4）。

筆者はパークランドウォークの約2/3を歩いてみたが，確かに線路跡で，歩道に沿って左右狭い樹林が延々と続いていた。樹林の外側はほとんど住宅の裏に面している。かなり野鳥の鳴き声が聞こえた。ところ



写真-3 パークランドウォークの歩道

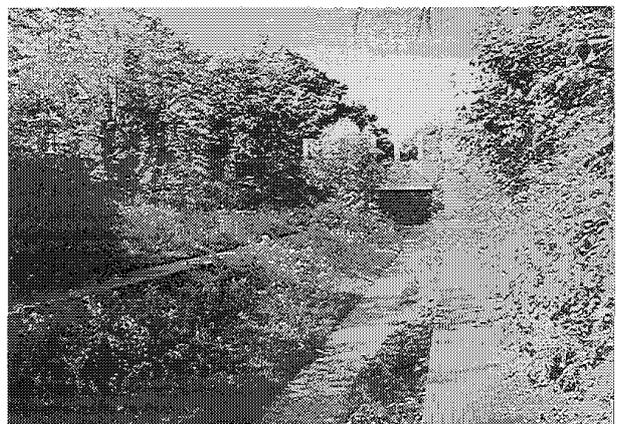


写真-4 線路やプラットフォームの跡があるパークランドウォーク

どころ高架橋、あるいは堀割となっている。またトンネルや小駅のプラットホームの名残りもあって風情がある。自然が復元しつつあるが、鉄道記念公園とでも名付けられる。日曜日だったので、子供のほか老人の散歩、若いカップルなどに出会った。地図によると中央通りに案内所の印があったので、その建物に立ち寄ったが、すでに案内所は移転していた。途中で園丁と出会ったがゴミ拾いもしていた。パークランドウォークは周辺住民の散策の場としてかなり活用されており、また住宅周辺の自然環境地域として、野鳥、リスなどの生息地としても住民に認知されているようである。

ま と め

ロンドンでもエコロジーパークに関しては、さまざまな形態、管理、利用があり多様である。前報の2公園とあわせて考えると、エコロジーパークの内容は大差ないが、とくに管理、運営で違いがある。前報のカムデンストリート自然園やガナスベリー・トライアングル自然園は、管理、運営が自然保護団体が主体であり、ギレスピー公園等は、地元の自治体はかなり力を入れているようである。その違いは地元の住民や自治体の姿勢にかかわるものと思われた。

ところで都市の中の自然地域は、その存在そのものに意義があるはずであり、自然教育の場として活用することは二義的であると思う。まず都市や農村においては、自然地域が残存していたら可能な限り保全をはかり、小さくても自然生態系を生活環境の中に確保しておくべきである。そして住民が日常的に、自由に自

然に接することができるようにしておくべきである。ドイツではこれらの自然地域をビオトープと呼んでいて同様な意義がある。また確保された自然地域は、その利用に関しては自然を破壊しない範囲の中で行われる必要がある。従って自然学習に利用するといって安易な利用は許されない。ただこのよう生活地域にある自然地域は、その存続や管理に、地元の住民の理解、協力がなければならないので、住民と連帯した運営がなされなければならない。日本ではまだロンドンのようなエコロジーパークの事例は少ないが、自治体、行政主導でなく、住民、学校、専門家などのパートナーシップによる保全と維持が望まれる。しかしその前に残存している自然地域をどのように確保するかが大きな課題である。それにはまずドイツで行われているようなビオトープのマッピングによって、地域の自然を把握し、地域の自然を認識することから始めなければならない。

参 考 文 献

- GLC 1985: Nature conservation guidelines for London. Ecology Handbook 3, 47p. GLC.
 London Ecology Unit 1990: Nature areas for city people. Ecology Handbook 14, 116p. LEU.
 LEU 1992: Nature conservation in Islington. Ecology Handbook 19, 60p. LEU.
 その他の資料。

(受付 1995年1月31日)